様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25　年　5　月　31　日現在

機関番号：１８００１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２７２０１０５
研究課題名（和文）現代ユダヤ系アメリカ文学における「ポスト・ホロコースト」の諸相に関する基礎的研究
研究課題名（英文）A Fundamental Study of Post-Holocaust Aspects in Contemporary Jewish American Literature

研究代表者
小林　正臣（KOBAYASHI MASAOMI）
琉球大学・教育学部・准教授
研究者番号：30404552

研究成果の概要（和文）：
現代ユダヤ系アメリカ作家は、概してホロコーストを従来的に据えようとしない。彼らは事件の再検や記憶の分有を求めるというよりも、未体験のホロコーストを想像することで、新たなホロコースト文学を創造しているのではないか。この着眼を実証するために、本研究は現代ユダヤ系アメリカ文学を「ポスト・ホロコースト」(Post-Holocaust)の文学として特徴づけてきた。研究の主眼は、いかに彼らがホロコーストを特異に捉えようとしているかの発見である。
研究成果の概要（英文）：
Contemporary Jewish American writers are, more often than not, trying to provide alternate perspectives on the Holocaust. Not only do they feel obliged to keep history alive for the victims, survivors, and future generations, but also they seek to expand the realm of Holocaust literature. The primary purpose of this study is to explore contemporary Jewish American writings on the theme of post-Holocaust so that it can illuminate the ways in which they offer their own approaches to the Holocaust.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：米文学

１．研究開始当初の背景

かつての代表的なユダヤ系アメリカ作家は、ホロコーストを逃れたユダヤ系移民の生活を往々にして写実的に描いた。しかし現代ユダヤ系アメリカ作家は、概してホロコーストを従来的に据えようとしない。彼らは事件の再検や記憶の分有を求めるというよりも、未体験のホロコーストを想像することで、新たなホロコースト文学を創造しているのではないか。

以上の着眼を実証するために、本研究は現代ユダヤ系アメリカ文学を「ポスト・ホロコースト」(Post-Holocaust)の文学として特徴づけていく。研究の主眼は、いかにホロコーストが現代ユダヤ系アメリカ作家たちに重視されているかの検証だけでなく、いかに彼

らがホロコーストを特異に捉えようとしているかの発見となる。なかでも、以下の３点は現代ユダヤ系アメリカ文学を特化している。

（１）レベッカ・ゴールドスタイン(Rebecca Goldstein)などの女性作家は、ホロコーストの犠牲者の視点ではなく、ユダヤ人に対して加害者意識または被害者意識をもつドイツ人の視点を導入している。結果、＜善悪＞という明快な二分法に収斂されない現代的作品群を発表している。
（２）イーサン・ケイニン(Ehan Canin)などの男性作家は、ナチ主義を逃れたユダヤ系移民を描いた作品群を発表している。しかし太平洋戦争やベトナム戦争で敵兵を殺めてしまい、その罪悪に後年まで苦悩するという展開にしていることが大きな特徴である。よって戦争被害者のみならず加害者としても描き出すことで、ホロコーストとアメリカを二重に問題視している。

（３）アート・スピーゲルマン(Art Spiegelman)などの漫画家は、強制収容所での惨劇をマンガ等で語ることでホロコーストの現代性を追求している。また同時に、収容所生存者の父親とアメリカ生まれの息子との葛藤も描いている。ホロコーストの貴重な生存者である一方で、アメリカ生活の不適応者でもある父親は、必ずしも特別視された人物として描出されていない。
　このように現代ユダヤ系アメリカ文学には両義的な姿勢が顕著である。家系にはホロコーストの被害者がいる一方、湾岸戦争やイラク戦争の時代を生きてきた彼らは、国政上では戦争加担者という意識が強く作風に作用している。これが「ポスト・ホロコースト」の大きな特性である。

２．研究の目的
　本研究の目的は「ポスト・ホロコースト」の視角から現代ユダヤ系アメリカ文学の基礎的研究を行うことである。ホロコーストはユダヤ史上の最大事件の一つであり、アメリカへと亡命したユダヤ人の末裔たちの作品においても最重要テーマの一つである。しかし現代ユダヤ系アメリカ作家の多くは、ホロコースト文学を深化させている一方、先輩作家らと異なる意識をもつことで進化もさせている。この伝統と革新の文学を「ポスト・ホロコースト」として概念化することで、ホロコースト文学の現代的特性と意義を明らかにする。また、その将来性を見据えた研究を行う。
　以上のことから、本研究は以下の３点を目的とする。

（１）既存の「歴史主義」的なユダヤ系アメリカ文学研究と現代ユダヤ系アメリカ文学研究の関係を「ポスト・ホロコースト」という新概念をとおして究明する。

（２）　現代ユダヤ系アメリカ文学作品を体系的に理解するため、ホロコーストという事件の特異性だけではなく、それによって戦争国アメリカにおいて一般化された問題群――例えば「被害」「加害」「罪悪」――に関わる文学作品群として包括的に観ていく。
（３）投稿論文や学会発表等を通して海外の研究者と積極的に意見交換し、情報収集に努めることで、現代ユダヤ系アメリカ作家たちが果たす知的・社会的・文化的役割を総合的に研究する。

３．研究の方法
　初年度は先行研究の批判的検討から始めた。文学史や研究書でユダヤ系アメリカ文学がどう扱われてきたかを年代順に系統化して分析する。どのようなユダヤ系作家たちの、どのような作品が既刊のアンソロジーに収録されているのか、いかなる「ポスト・ホロコースト」の様相が文学研究書で評価されてきたのか、そして評価されてこなかったのかなどの基礎的な情報を収集し整理した。
　２年目は既刊のアンソロジーや研究書で扱われていない現代ユダヤ系アメリカ文学作品や作家について調査を行った。また、それら作家や文学作品について系統化して整理を行った。、また研究の途中報告を行うためにも、この年度からアメリカ文学関連の学会誌に積極的に投稿を始めた。
　３年目は、１～２年目で収集し整理した情報を比較対照させ詳細に検討し、ユダヤ系アメリカ文学史データベースを作成する。また、そのデータベースから導き出せる現象を「ポスト・ホロコースト」との関連で考察した。そのような包括的研究資料の検討と同時進行で、１２月頃までに研究成果をまとめ、報告書を仕上げる準備を行った。

４．研究成果
　各年度において、成果報告を適宜行うために、論文を執筆し、審査論文として発表してきた。また最終年度においては、研究活動を総括するために、本研究課題名と同名の成果論集「現代ユダ系文学における『ポスト・ホロコースト』の諸相に関する基礎的研究」を作成した。収録内容は以下の通りである。

【研究論文】
1.「自他をめぐる者たち――イーサン・ケイニンの世界」.『ユダヤ系文学の歴史と現在』(2009 年)：279-99. Print.

2. “An Ethics of the Dead: Rebecca Goldstein on the Holocaust.” *Kyushu American Literature* 49 (2008): 73-82. Print.

3. “Otherness or Otherwise than Brothers: Ethan Canin via Emmanuel Levinas.” *Southern Review* 23 (2008): 85-97. Print.

4. “The Discursive Water of Kurt Vonnegut.” *Southern Review* 29 (2009): 45-61. Print.

5. “Paranoid Android” to “Some Chimp in the Zoo”: Personhood, Paul Auster, and *Moon Palace*.” *The Journal of the American Literature Society* 9 (2010): 53-69. Print.

6. “The Lasting Feel of ‘Goodbye, Columbus.’” *Kyushu American Literature* 52 (2011): 29-39. Print.

7. “Anything Can Happen”: Paul Auster via Anna Blume.” *Kyushu American Literature* 53 (2012): 63-76. Print.

【エッセイ】

8. “9/11, 3/11, and ‘Groundless Ill Will’”: The World According to Haruki Murakami.” *Southern Review* 27 (2012): 171-76. Print.

【データベース収録資料】

＊本報告書には、今回の補助金交付期間外に発表された論文も含まれている。それらは本研究課題と密接な関係があることから含めている。

以上、成果論集を作成した上で、「ポスト・ホロコースト」をめぐる現代ユダヤ系アメリカ文学研究で得られた成果は以下のとおりである。

（１）現代ユダヤ系アメリカ文学の多様性に合わせて〈被害〉〈加害〉〈被加害〉をめぐる作品群として分別し、各々の領域において想像力や問題意識がどのように「ポスト・ホロコースト」として表現されたのかを体系的に整理した。

（２）現代ユダヤ系文学作品群を「〈被害〉をめぐる文学」「〈加害〉をめぐる文学」「〈被加害〉をめぐる文学」とし、それぞれを代表する作家とテーマを以下のようにまとめた。

①〈被害〉をめぐる文学：メルヴィン・ジュールズ・ビュキートやスティーヴ・スターンなどの伝統的作家は、第１世代が経験したホロコーストを語り継いだ第２世代よりさらに次世代に属す作家であることを強く意識している。よってホロコーストをめぐる物語を自作品で展開するだけでなく、ホロコーストをめぐる記憶の分有をアンソロジーの編者として行っている。

②〈加害〉をめぐる文学：レベッカ・ゴールドスタインやエイミー・ベンダーなどの女性作家は、ホロコーストの犠牲者だけでなく、ユダヤ人に対して加害者意識をもつドイツ人女性などの視点を導入している。その結果、＜善悪＞という明快な二分法に収斂されない現代的作品を次々と発表している。

③〈被加害〉をめぐる文学：イーサン・ケイニン、ポール・オースター、フィリップ・ロスなどの男性作家は、迫害されたユダヤ系移民をめぐる作品を発表している。しかし太平洋戦争やベトナム戦争やテロリズムに関わることで、その罪悪に後年まで苦悩するという展開にしていることが大きな特徴である。したがって被害者のみならず加害者としても描き出すことで、ホロコーストとアメリカを二重に問題視している。

（３）このように、現代ユダヤ系アメリカ文学には両義的な姿勢がきわめて顕著である。家系にはホロコーストの被害者がいる一方、戦争とテロの時代を生きてきた作家たちは、国政上では加担者という意識が強く作風に作用している。これが「ポスト・ホロコースト」文学作品の大きな特性である。

（４）以上のことなどを総合し、研究の結論を次のようにまとめることができる。

「ポスト・ホロコースト」をめぐる文学とはユダヤ人の多重化する意識をめぐる文学である。多様化する現代ユダヤ系アメリカ文学に併せてテーマや問題意識に一貫した特徴が見られることによって、そのことは明らかになった。現代ユダヤ系アメリカ作家は、過去にホロコーストの犠牲者を抱えている一方、アメリカ人である限り自らも加害者となりえることを明確に意識して執筆している。すなわちテロの対象となることで被害者となり、他国に軍事介入することで加害者ともなったアメリカに生きる作家は、そうして重化する意識を「ポスト・ホロコースト」文

学作品に反映させている。彼らは現代アメリカの視座からホロコーストに迫ることで、新たなホロコースト文学を開拓しているのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① Kobayashi, Masaomi. “9/11, 3/11, and ‘Groundless Ill Will’: The World According to Haruki Murakami.” *Southern Review* 27 (2012): 171-76. Print.

② Kobayashi, Masaomi. “‘Anything Can Happen’: Paul Auster via Anna Blume.” *Kyushu American Literature* 53 (2012): 63-76. Print.

③ Kobayashi, Masaomi. “The Lasting Feel of ‘Goodbye, Columbus.’” *Kyushu American Literature* 52 (2011): 29-39. Print.

④ Kobayashi, Masaomi. “‘Paranoid Android’ to ‘Some Chimp in the Zoo’: Personhood, Paul Auster, and *Moon Palace*.” *The Journal of the American Literature Society of Japan* 9 (2010): 53-69. Print.

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
小林　正臣（KOBAYASHI MASAOMI）
琉球大学・教育学部・准教授
研究者番号：30404552

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：